

平成21年5月25日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17530112

研究課題名（和文）デジタル丸山真男研究

研究課題名（英文）A Computerized Study of Maruyama Masao

研究代表者

清水 靖久（SHIMIZU YASUHISA）

九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授

研究者番号：00170986

研究成果の概要：

戦後日本を代表する政治学者・思想史家の丸山真男（1914～1996年）の政治思想の全体像を解明するために、その膨大な著作をデジタル化してコンピューターで網羅的に分析することを本研究は試みた。日本社会の民主化を第一の目標とした戦争直後、市民による多様な結社形成を説いた1960年前後、自由な人格形成を阻む日本思想の古層を専ら研究した1970年代以後を通じて、丸山がリベラルであろうとしたことの意味を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	3,200,000	390,000	3,590,000

研究分野：日本政治思想史

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：丸山真男、政治思想、民主化、リベラル、米国

## 1. 研究開始当初の背景

戦後日本を代表する政治学者・思想史家の丸山真男の政治思想については、数多くの研究が提出されてきたが、各研究者が各自の印象にもとづいて思い思いの丸山像を描いてきたことは否めなかった。というのも丸山の政治思想が多面的かつ状況的であり、その著作が談話まで含めると膨大なもので、その構造と軌跡を把握することが容易でなかったからである。そこで本研究は、丸山の全著作をテキスト・ファイルにして、コンピューター

で数量的に分析する方法を用いて、その政治思想の全体像を解明しようとした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、数量的分析の方法を用いながら、丸山の政治思想の全体像を解明することにあった。各時期における丸山の思想の構造を把握するとともに、その軌跡を追跡することを通じて、日本の社会科学史とくに政治学史の文脈のうえに丸山の思想を位置づ

けようとした。戦後の民主主義の思想家たちのなかで、丸山が自由主義の思想を強く抱いていたことは誰もが感じていたとしても、その意味を思想史的に研究する必要がある。たとえばファシズムの特質をめぐって、あるいは米国社会の理解に関して、また日本思想の伝統をめぐって、丸山が考えたことの構造と軌跡を明らかにしようとした。

### 3. 研究の方法

本研究は、丸山の政治思想の全体像を解明するために、思想史的研究方法に加えて、数量的分析の方法を用いた。単なる印象や記憶力に頼らない確実な方法として、丸山の著作をデジタル・テキストにして、コンピューターで網羅的に分析することを試みた。そのために丸山の全著作をスキャナで撮影し、その画像をOCRソフトで文字認識したが、謝金による研究補助を得て誤認識を訂正する作業を進めた。著作権の侵害が生じないように、テキスト・ファイルを借りることも貸すこともできないし、丁寧にOCR処理されたテキスト・ファイルにも誤認文字が残るので、最後は自分で点検しなければならなかった。

丸山の著作は厩大であり、今もなお刊行が続いている。『丸山眞男集』全17巻(1995.9～1997.3)『丸山眞男座談』全9冊(1998.4-12)『丸山眞男講義録』全7冊(1998.5～2000.11)『丸山眞男書簡集』全5巻(2003.11～2004.9)『丸山眞男回顧談』全2冊(2006.8-10)『丸山眞男話文集』全4冊(2008.5～)『丸山眞男手帖』既刊49号(1997.4～)など。それらの著作すべてをテキスト・ファイルにすれば、鍵となる言葉の使用頻度とその推移を網羅的に分析できる。

本研究は、もちろん思想史的研究として、著作当時の思想状況、他の思想家との関係などに注目しながら、丸山の思想の構造と軌跡を把握しようとした。文献調査だけではわからないことも少なくなく、当時の状況を知る人たちへの聞き取り調査も重ねた。丸山と米国との関係が重要と気づいたので、現地に滞在して文書館の調査もした。

### 4. 研究成果

本研究は、思想史的研究方法に加えて数量的分析方法を用いることによって、丸山の政治思想の特徴を明らかにした。丸山の政治思想は、「民主主義の永久革命」論で知られるが、その核心には自由主義の思想があり、暴力的なファシズムの否定のうえに成り立っていた。ファシズムに関する丸山の問題とその推移については、本研究の成果として、次

のような知見を得た。

第二次大戦後に限って言えば、丸山にとってファシズムは、イタリアのそれを指すことが稀にあったとしても、ごく一般的な概念であって、「あの凶暴な支配権」を獲得した「ドイツ・ファシズム」(『現代自由主義論』1948年9月)というわずかな用例や、ずっと多く「イタリー・ファシズム」や「日本ファシズム」の用例がある。日本ファシズムについては、三部作の一つと考えられがちな「超国家主義の論理と心理」(1946年5月)が『丸山眞男回顧談』によれば1930年代後半に「軍部ファシズム」と対立した「重臣リベラリズム」に支えられた天皇制を批判した論文だったことは別にしても、「日本ファシズムの思想と運動」(1948年5月)では東西のファシズムの共通点とともに日本の「上からのファシズム的支配」の相違点を解明したし、「軍国支配者の精神形態」(1949年5月)では「日本ファシズムの矮小性」を主題としたように、ナチの主体的決断ゆえの悪との対照に力点があった。

1950年代の丸山がファシズムを論じたのは、ファシズム再興への恐れからであり、一般的概念の程度を強めた。冷戦下の米国で拮がったマッカーシーイズムへの危機感から、自由主義や民主主義の名におけるファシズムを問題とし、ナチのグライヒシャルトゥングのような強制的同質化をその核心とみなして、日本にも同じ恐れがあると1959年ころまで警戒した。西欧ではファシズム分析が全体主義研究に吸収されることに一定の意味を認めながらも、「そうしたアプローチでは「自由世界」におけるファッション化の問題が見落される傾向がある」(『追記』1957年3月)と指摘したように、ファシズムを全体主義に解消することには反対だった。1960年代後半にはファシズム再現の危険を叫ぶような主張をたしなめてもいるが、歴史としてのファシズムを問いつづけ、とくにナチ「革命」が現代の人間に投げかける「普遍的挑戦の意味」(『現代における人間と政治』1961年9月)を考えていたと思われる。

その後も丸山は、ファシズム概念を捨てなかった。1970年代後半にファシズムの用語は昭和史研究に有効かという疑問が提出された(伊藤隆「昭和政治史研究への一視角」『思想』1976年6月ほか)が、そのころ米国において「大衆ファシズム」にたいして意外にアメリカは弱いのではないか(古矢旬宛1976年8月18日)と感じていた丸山は、帰国後東大の研究会で「日本ファシズム」の問題が論じられたとき、「戦時体制というべきだ」という考えがあるとの意味がよく分りませんでした」と洩らしている(三谷太一郎宛1977年9月26日)。将来の日本のファシズムの恐れに

については、「昔のようなファシズムはないんですけれど、別の意味の大勢順応がありますから、楽観していませんね」と語っている（1985年3月31日談）。長谷川如是閑はファシズムに楽観的だったが、「そこには人間のなかにある——あるいは歴史のなかの非合理的要素に対する、彼の過小評価というものがあったと思うんです」（1987年11月24日談）と語った丸山には、ファシズムは、人間と歴史の非合理的要素や凶暴さに訴えるものとして楽観できなかつた。

独日のファシズムの相違は、1980年代の丸山には明らかに意識されていた。『後衛の位置から』（1982年9月）の「近代日本の知識人」加筆部分では、ドイツよりも日本の方がグライヒシャルトゥングが容易だった反面、ドイツ知識人がナチズムにコミットしたほど日本の知識人は「皇道」イデオロギーにコミットせず、ただ世論に同化しただけだったが、そこには日本の「インテリ」のまとまりの弱さと、「擬似インテリ」の磁性の強さが表現されていると論じた。丸山は、日本ファシズムについて原点的認識は変えなかつたが、時とともに相対化も進めただろう。『丸山眞男回顧談』では、「ファシズムの時代の大学と知識人」に関して、「学生のなかへ当時の時局的な思想が浸透しなかつたひとつの原因は、右翼の程度が低かつたということもあると思うのです」、「これはナチと非常に違うところなのではないか。ナチは学生組織が大きかつた。教授の追放でも、学生の突き上げで行われたという場合が多い」と語っている。

丸山は、独日のファシズムと大学および知識人との関係をそのように捉えていた。たしかにドイツではナチが政権を掌握した直後、学生組織の力でユダヤ人教授を中心とする「非ドイツ的」教授を大量に追放したが、その前触れとして1933年5月の焚書が示威的効果を上げており、研究室封鎖までする必要はなかつた。日本ではファシストによる「反国体的」教授への辞職勧告や著書雑誌集会での攻撃があり、右翼学生による質問攻めや答案攻めはあつても、真面目に受けとめられることは多くなく、研究室を封鎖する力はなかつたと思われる。おそらくナチは、もし研究室を封鎖する必要があるばしていただろう。それゆえ「ナチもしなかつた」は、歴史的事実には違いないが、事実だったら何でも述べればよいわけでないとするれば、効果的な事実だっただろうか。

もっとも1968年末の丸山が、日本ファシズムとナチズムとの違いをそのように意識していたとは限らない。とくに1930年代末の東大での歴史的経験は、痛切に記憶されていた。1939年12月4日の終講で津田左右吉が右翼学生から糺問され軟禁されるのに丸

山が同席して応戦した経験を1963年に回想した「ある日の津田博士と私」（1963年10月）では、ファナティックな「狂熱右翼」の学生協会グループについて「蓑田胸喜らの「原理日本社」が軍部・貴族院議員や財界の一部の後援をえて作ったナチばりの学生組織」と記述している。1974年11月16日の東大での講演「南原先生を師として」（7507）でも、1930年代末の原理日本社グループといえれば74年当時の極右団体を想像しがちだが、「その背景の深さと権力中枢との結びつきという点に於ては、ほとんど比較を絶するものがある」と振り返っており、「ナチばり」という表現は用いなくても認識を保っていた。

これを要するに、丸山は、1946年の「超国家主義の論理と心理」ではまだファシズムの語を用いていないが、1940年代後半にはナチの悪どさを中心にしてファシズムを把握しており、1950年代には米国で拡がった強制的同質化への危機感からファシズムの一般概念度を強めた。1970年代まではナチは最悪だったとしても日本ファシズムも劣らず悪かつたと考えていたのに対して、1980年代には日本ファシズムの程度の低さを認めたが、それでもファシズムを生じさせる人間の非合理性や暴力性に決して楽観的ではなかつた。そのようにファシズムという用語に関して、丸山の政治思想を数量的に分析するとともに思想的に研究することによって、1968年末の東大紛争における発言の意味を考察し、丸山の自由主義の思想の特徴を浮彫にした。

本研究は、丸山と米国との関係についても、丸山が1961年に入国ビザを一時拒否され1973年にも一旦取消されたことを糸口にして、米国社会に関する他者理解の問題、翻って日本社会に関する自己理解の問題を考察した。米国滞在調査中にはその研究成果を英語で発表するなどして、国内外で多くの反響を呼んだ。戦後日本の民主化を構想した丸山は、日本社会でリベラルであるとはどういうことか戦後ずっと考えた人でもあり、他者をその他在において理解する知性を重んじた人でもあつた。そのような丸山の政治思想について本研究が明らかにした多くの研究成果は、5の雑誌論文にまとめてある。

今後の展望としては、本研究で作成した丸山の全著作のテキスト・ファイルをさらに整える必要がある。これまで作成したファイルは、誤認識の訂正がまだ完璧ではなく、続々刊行される著作を編年順に編集しきれていない。丸山文庫の未刊行資料がやがて公開されれば、それらも含めて丸山の著作のファイルを整えたい。しかし戦後日本を代表する政治学者・思想史家としての丸山の思想を研究する礎石を固めたことは確かであり、今後さらに大きな研究成果を挙げることを期して

いる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

① 清水靖久「丸山眞男の秩序構想」『政治思想研究』第9号、94-119頁、2009年、査読なし

② 清水靖久「重臣リベラリズム論の射程——『丸山眞男回顧談』」『政治思想学会会報』第26号、10-14頁、2008年、査読なし

③ 清水靖久「丸山眞男と米国」『法政研究』第74巻第4号、59-119頁、2008年、査読あり

④ Shimizu Yasuhisa, Maruyama Masao and America the Incomprehensible, Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University, Vol. 13, pp. 1-7, 2007, 査読なし

⑤ 清水靖久「近代日本の政治的権威とキリスト教」『比較社会文化』第11巻、15-23頁、2005年、査読なし

[学会発表] (計2件)

① 清水靖久「丸山眞男の秩序構想」、政治思想学会、2008.5.25、岡山大学

② Yasuhisa Shimizu, Maruyama Masao and America the Incomprehensible, Seminar at the Center for Japanese Studies, 2006.9.18, University of California at Berkeley

[その他]

ホームページ等

<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K001718/research.html>

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 靖久 (SHIMIZU YASUHISA)

九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授

研究者番号：00170986